義肢装着者百余名を検診して

福岡県身体障害者更生指導所 香 月 正 紀
相談所
九州大学医学部整形外科教室 道 免 士 久

Results of Investigation about 108 Amputees with Prosthesis

By

M. Katsuki

Fukuoka Prefectural Rehabilitation Center for Handicapped.

&

H. Doumen

Department of Orthopedic Surgery, Kyushu University. (Direct.: Prof. T. Amako)

我々は、本年2月5日より5日間、福岡県各地で開催された義肢装着者に対する装着訓練に参加し、切断者の断端状況、装着して居る義肢及び装着状況について調査を行った。

実施せられた地方は筑紫、朝倉、八女、田川、築上の5ヶ所で、総計108名参集した。切断部位は下肢が64%を占め、大腿、下腿、上腕、前腕の順である。年齢は15才より35才までが多く、69%で、従つて義肢装着年数も5年以上経験がある者が82%あり、最高は51年の経験者であつた。今回参集した人々は義肢装着して相当年数経ち、社会人として働いて居る者が大部分である訳である。

切断原因としては戦傷が多く、上肢、下肢共に戦傷、産業災害、交通事故、疾病の順で、同じ傾向である。断端実用長は上腕切断の中に肩関節離断を含めた為、5cm以下の短断端が33%あつた外、前腕、大腿、下腿共に概して長い断端で、其の形状は大腿、下腿共に円筒形、円錐形の良好な者が多く70%を占める。断端筋萎縮度は大腿切断者に於て断端長を問題とせず、根部、中央部、末端部に分けて測定したが、根部の83.6%に対し末端部は64.7%で萎縮高度となる。又、下腿切断では下腿の萎縮度74.6%、大腿の中央周径78.8%で、下腿のみならず、大腿まで大なる影響のある事を知るのである。切断後、大腿では平均13年、下腿で平均19年経過して居るので、この位が筋萎縮の限界ではなからうか。切断してから1年以上義肢を装着して居ない者は、上肢の50%に反し下肢は37%で、下肢の方が早期に装着して居る。下肢切断者はそ

のままでは起居移動に困難な為であろう。

大腿義肢の体重支持方法として、断端支持、坐骨支持とに分けられる。しかし何れも単独で支持するのではなく、他に比し該部が支持に主に働くという区別に過ぎない、又肥満した人に多いが、何処といつて特に支持する所がないというものがある。便宜上全周支持としたら坐骨支持と同数で、断端支持は1名に過ぎなかつた。関節機構は膝関節固定、足関節遊動が半数の55%で最も多かつた。義肢の装着方法として、肩バンド、腰バンドの併用が普遍的で59%であり、Suctionは1名で未だ普及して居るとは云い難い。下腿義肢では足関節の遊動が僅かに54%で多かつたけれど、何故か固定も案外に多かつた。義肢重量は製作所により差異が大きかつたが、平均の重量を求めると、上腕1.2kg、前腕0.5kg、大腿3.2kg、下腿1.9kgで、三好氏の調査と大体一致する。大腿義肢は健側より若干短く製作するのが通例である。実際に測定して見ると、義肢長が1~2cm短いものが大部分の72%であるけれど、中には5cmも短い者や逆に義肢が長い者も若干居た。

August Blenckeは義肢長の短い為に、切断者の脊椎彎曲が起ると云い、後藤氏も之を肯定し、未装着者に脊椎側彎を見ずと云つて居る。斎藤氏は装着者の90.9%に見て居るし、我々も亦89.7%に側彎を見た。

下肢義肢の材料は大腿、下腿義肢共に1名革製の外、全部ニューム製で木製は見なかつた。

歩行距離は、大腿切断も下腿切断も概してよく歩き、2km以下が共に23%であつたが、最高は大腿切断で

49km, 下腿切断で1日中という驚異的な者も居た。階段や坂道の昇降はさすがに大腿切断に於て不能3%, 困難な者15%存在する。昇降可能な者でも, 昇降共に同程度という者59%である外, 降りる時の方が昇る時より困難な者が約2倍多い。

発汗は上肢に少なく下肢が主であり, 依つて義肢装着の爲めの皮膚損傷は上肢にはない。下肢は全身の体重をかける関係からである。

義肢を常時装着して居る者は, 下腿, 大腿, 前腕, 上腕の順で, 平均し上肢は41%, 下肢は77%, 時々装着するという上肢9%, 下肢3%を除いて何れも外出, 労働時には全部装着して居る。第一次大戦後, 独逸では上肢義肢の使用率10%, 水町氏によれば今次大戦中50%であつたというが, 今回の成績がかくも高率なのは装着訓練という特殊なケースである為であろう。

職業の中, 農業は前腕39%, 以下上腕, 下腿, 大腿の順で, 農業は特に大腿切断者にとつて作業の性質上適し難いのではあるまいか, それに反して洋裁, プリント, 時計, ラジオ修理, 組立等の手先の技術的仕事は反対に大腿41%, 以下下腿, 前腕, 上腕の順で,

下肢切断者に圧倒的に多い。又切断時と現在の職業とを対比すれば, 上肢切断の現職復帰は28%, 之れに對し下肢のそれは49%であり, 転職は下肢の25%に比し62%を占め, しかも上肢切断者の職種変更は屢々である。之を要するに, 上肢切断者に適当な職業のない事に原因して居る。更生指導, 職業補導の拡充は勿論, 社会問題として考へべき余地を残して居る。

二肢切断は7名, 6.9%であつた。一肢切断に比べ受ける精神的打撃は深刻で, 71%が転職し, 手先の技術を職業として居る。

義肢装着者の希望事項は, 義肢の耐久力の要望が最も多かつた。義肢の更新はまちまちであるが, 平均上腕5.1年, 前腕7.7年, 大腿6.1年, 下腿7.1年であつて, 経済的な理由により義肢更新が思うに任せないのて, 耐久力の要望も無理からぬ事である。

我々は義肢装着者のみを対称とし調査したが, 初めての試みであるので不充分的謬りは免れないと思う。社会福祉法が制定せられて数年, 四肢切断者に大なる恩恵を与えて居る事を感じたのであるが, 今後一層の推進を希望するものである。

会 計 報 告